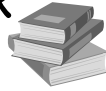


本棚 ぶらり

テーマ
伝説・伝承



『絵で見て不思議！ 鬼ともののけの文化史』

ささまよしひこ
笹間良彦／著

遊子館 2005年



みなさんは「鬼」と言えばどんな姿を想像するだろうか。古代中国では死体や死者の靈魂を表す象形文字から鬼という漢字が生まれ、その名残から現代の日本では人が亡くなることを「鬼籍に入る」とも言う。鬼の概念が日本に伝来した6世紀頃には、陰陽五行説から鬼は恐ろしいものと認識され、奈良・平安時代には政権に敵対する者たちを鬼と見なして抑圧することもあった。しかし江戸時代には幕府が絶対的な権力を確立したことで、鬼を敵対勢力の象徴とする見方は減衰していった。今日では鬼が節分やことわざで語られる場面も多い。後半には天狗、河童、人魚や鵜など多数の「もののけ」が登場し、本書全体に収録された約150点の絵図を見ているだけでも楽しめる。

『歌になった 「にっぽん昔話・伝説」の謎』

ごうだみちと
合田道人／著

幻冬舎 2002年



『竹取物語』のかぐや姫が生まれた竹は、どうして光り輝いていたのか。『花咲かじいさん』の犬はなぜ「ぼち」というのか。本書は昔話や伝説、昔話を題材にした童謡などから、多くの人が見過ごしてしまうような謎を拾い上げて提示し、それらの解明に迫る。

昔話や伝説の内容が事実かどうかを確認することは難しい。従って、それらから生まれた謎にも、正しい答えなどはないのかもしれない。しかし、著者の書く私説には「なるほど」と感じさせるものがある。昔話を少し違った視点から眺めることのできる一冊。

『ザシキワラシと婆さま夜語り 遠野のむかし話』

ささき きぜん
佐々木喜善／著

河出書房新社 2020年



柳田国男の『遠野物語』の序文に「この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり」とある。

「佐々木鏡石」とは、本書の著者・佐々木喜善のペンネームである。『遠野物語』にもザシキワラシの話は出てくるが、本書によって、奥州にはほかにも多くのザシキワラシの言い伝えがあることに気づかされる。その姿や現れ方、呼び方などもさまざまのようだ。

後半には、大正12年以降に喜善が村の老婆から聞き取った、ザシキワラシ以外の不思議な話がまとめられている。「その大部分は婆様が子供の時、その祖母から聴いたもの」という。話を収集した際の様子などを記した前段の「自序」を読むと、口伝とはどのようなものかを感じ取ることができて面白い。

『日本の幻獣図譜 大江戸不思議生物出現録』

ゆもと こういち
湯本 豪一／著

東京美術 2016年



「繰り返しになるが、幻獣とは存在しないにもかかわらず“いる”と信じられた生き物だ」これは本の中の一文です。また、河童や人魚などの幻獣を「妖怪のように異界に消え去るものとは違って、時には捕らえられることさえある不思議な“生き物”」としています。

本書では「地」「水」「空」といった章ごとに、江戸時代にその存在を信じられていたという数々の幻獣が当時の人々の目にも触れていたはずの絵や版本、ミイラなどとともに紹介されています。

仮に自分が江戸の昔に生まれ、説明のつかない奇怪な事象に遭遇したとしたら……。真剣に想像すると、幻獣が身近に感じられるかもしれません。